

## つながって、面白い

井上宏

ふと、何でこんなことになったのだろうか？何でこんなことをしているのだろうか？と不思議に思う時がある。僕が今、パソコンに向かって、「大塩研究」向けにこの文章を書いているのも、何だか不思議な回り合わせだ。

物事には何でも原因があって結果があるとしても、予想も付かないつながり方をする時があるのが面白い。この分なら、風が吹いたら桶屋が儲かるというのも、あながち嘘ではないなと思う。もっと今風に言えば、カオス理論のバタフライ・エフェクトという奴だ。

いや、僕のこの文章はバタフライ・エフェクトの産物だけではないぞ。むしろ、組織論で言つ、「六度の分離」現象の方が、影響が大きいのではないかな？

バタフライ・エフェクトとは、ある場所での蝶の羽はたぎが、地球の裏側で天候異変を引き起こすかも知れない。つまり、この世界は決定論的ではなく、予測不可能な側面を持つという物理学の理論である。六度の分離とは、平たく言えば、「世間は狭い」ということで、英語では「イツツ・ア・スモールワールド」という。

知人の知人の知人と、辿っていけば、平均六度で、今まで知らなかったアマゾン奥地の人になっただって行き着くという理論であり、実験で証明されている。長い経緯から生まれたことわざが科学によって検証され、理論にまで昇華されているのが面白い。では、これらの理論は、この一文の執筆に、どんな風に働いたのだろうか。

この執筆には、まず、二つの「思いがけない出会い」が影響している。僕は会社定年後、短期大学で教鞭を執り、十年で退職した。そこで、かねて興味を持っていた近世古文書や江戸時代の市民思想「石門心学」の勉強を始め、朝日カルチャーセンターの古文書講座を受講し、また、心学明誠舎の舎員となった。思いがけない出会いは、古文書の勉強の中であった。

古文書の勉強を進める内、大阪商大で中級講座があることを知り、これも受講することにした。講師は三重大学名誉教授の酒井一先生。誠に魅力的な講義内容だった。ある時、先生が主宰しておられる大塩事件研

研究会の展示会案内があった。大塩の乱百七十年を記念したものという。檄文の復刻版木も展示されること。古文書好きとして、是非見たいと思い、出かけた。〇七年（平成十九年）二月、場所は天神橋筋商店街にある「おかげ館」である。

おかげ館に入ると、表示札があるだけで展示物がほとんど無い。どうしたのかと、受付の男性に尋ねた。後に重要人物だと分かるその人は、今近所のPLP会館で講演会をしているので、展示物はそちらの方に持って行った。ご覧になりたいなら、講演会に行かれたらどうですかと言つ。そんな馬鹿な…と思つたが、このまま帰つては、一体何をしに来たか分からないので、講演会に行った。そこで、一つ目の思いがけない出会いをした。カルチャーセンター仲間の内田正雄さんである。

内田さんは、実は大塩事件研究会の世話役をしているとのこと。カルチャーセンターでは話をする機会がなかったのですが、そのことを知らず、ビックリした。「世間は狭い」。

内田さんは、「大塩事件研究会でも、酒井先生を講師に関係古文書を読む会をしていますよ。良ければ参加しませんか」と言つ。四月から参加することにした。

場所は上六（上本町六丁目）の大阪府教育会館である。

ここで二つ目の思いがけない出会いがあった。

会場に行き、自由席だということで、空いている席に座つた。しばらくして一人の紳士が僕に近づいてきた。「今市中学卒業の井上さんではないですか」と言つ。えっ？

僕は彼の顔をまじまじと眺めた。「山田さんですか？」と、すぐ彼の名前が出たのが不思議だ。最近、人の名前を思い出せなくて困っているのに。

山田隆一君とは中学卒業以来、大学時代に一度電車で出会つただけで、五十年は会っていない。それなのに、こんなところで会つとは、全く予期せぬ出来事だつた。しかも、よく憶えていてくれたものだ。「イツツ・ア・スモールワールド」。

その彼を介して、内田さんや久保在久さん・奥野まさ子さんや飲み仲間となつた。彼は酒が好きで、セミナー修了後、お三方と時々一杯やっている。僕も彼に誘われて参加して以来、毎回一緒に一緒にいる。久保さんは、展示会の時受付をしていた人で、研究会の事務局長であり、実は、僕が今寄稿しようとしている、この『大塩研究』の編集長である。また、文芸誌『帯文庫』の編集委員でもある。

『帯文庫』主宰者の松井勇さんは大塩事件研究会の会員であり、久保さんを通じて、松井さんと面識を識得た。

これで、内田さん・山田君との二つの思いがけない出会いを通じて久保さんを知り、『大塩研究』の門前に立った。しかし、そこに入るには、もう一つ、蝶の羽ばたきが必要だった。「石門心学」という名の蝶だ。

僕が石門心学の勉強のため入舎した心学明誠舎は、社団法人として百年以上の歴史を持っている。文科省からホームページを作るよう指導されているにも拘わらず、作り手がいなかった。それで僕がボランティアで作ることになった。その関連から、僕自身のホームページも必要となり作ったが、内容が硬いので、何か軟らかいものも入れようと、出身地の思い出を載せた。「千林・今市界隈の思い出」という文章である。

ところが、酒席で話をしている内に、久保さんが千林近くの電電公社独身寮に住んでいたことを知った。これも不思議な巡り合わせだ。それならと僕の文章を紹介した。それを読んだ久保さんが『大塩研究』や『帯文庫』への寄稿を勧めたという次第だ。

石門心学の勉強から、そのホームページ作り、僕自身のホームページ、僕の雑文とつながって、『大塩研究』

の門に入るようになった。人と人とのつながり、「こと」と「こと」のつながりが、思いがけない結果を生んだ。僕はこれを面白いと感じ、『大塩研究』には、是非このこと自体を書いてみよう、キーボードを叩いている。また、『帯文庫』にも別の一文を寄せることにした。

ここで一つ、詩らしいものが浮かんだ。

「誰かが誰かにつながって

何かが何かにつながって

何が起るか分からない

だから世の中、面白い

だから生きるって、面白い

もちろん後の二行は、こう変わるかも知れない。

「だから世の中、おそろしい

だから生きるって、おそろしい

しかし僕は、人生も残り少ない古希の歳になって、なお、面白いつながりを求めて生きていこうと思っっている。